

コロナ後の学校教育における授業のかたち

— コミュニケーション不安に着目して —

学籍番号 229330

氏名 森本拓

主指導教員 岡 博昭

副指導教員 石川 聡子

1. 背景

今日の社会において、コミュニケーション能力は必要不可欠であるということが新卒採用に関する調査で明らかとなった。しかし、新型コロナウイルスの流行により、コミュニケーションの機会が減少してしまったという課題がある。学校でも同様のことが言える。コロナ禍による登校日の減少や年間行事が実施されないなど、子どもたちのコミュニケーションの機会が奪われてしまっていた。つまり、教育の現場では、このコロナ禍でのコミュニケーション能力の伸び悩みや不安を学校で修復していくことが1つの課題であると考えられる。

2. 研究の実践内容

2.1 振り返りシートの開発と実践

協働学習では生徒間のコミュニケーションに関する効果について検証したが、振り返りシートでは教員-生徒間のコミュニケーションについて検証した。各授業の最後に、授業の感想や質問を振り返りシートに書いてもらった。それに対し、筆者がコメント書き、次回の授業の最初に返すというサイクルを取り入れた。

2.2 発展課題実習Ⅰでの協働学習

発展課題実習Ⅰでは、演習問題を用いた班活動を行った。各班で演習問題を話し合いながら解き、班員全員が解き終えたら教員に解いた問題を解説しに行くという流れを取った。解説の際、教員から班員をランダムに指名し、指名された生徒が該当の問題を解説する。そのため、班の誰が当たるのかわからないため、班員全員が問題を解けていないといけなため、班内の情報共有が必須である。この活動により、他者との情報共有をすることでコミュニケーション能力の育成を図った。

2.3 発展課題実習Ⅱでの協働学習

発展課題実習Ⅱでは、クラスを2つのグループに分け、2パターンの演習問題を事前に解くように指示をした。授業開始時に生徒に、自分の解いてきた演習問題について、筆者が作成した解説動画を視聴させた。その後、同じ演習問題を解いた生徒でペアを作り、演習問題についてわかった点や分からなかった点について話し合いをさせた。話し合い後、自分の解いた演習問

題について、解いていないもう一方のグループの生徒とペアを合体させ、班を作成させた。その班内でもう一方のペアに対し、解説を行うという、ジグソー法を用いた協働学習を開発し、実践した。発展課題実習Ⅱでは生徒の教え合う活動に重きを置き、他者に自分の考えを伝える力の伸長に力を入れた。

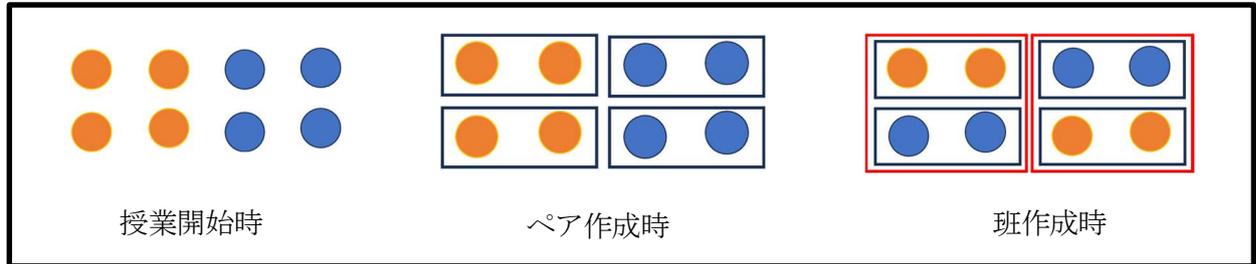


図 発展課題実習Ⅱでの協働学習 イメージ図

3. 研究の結果

3.1 コミュニケーションに関するアンケート調査結果

アンケートは、「小グループの討論に参加している間、積極的に発言する。」などのコミュニケーションに関する質問項目を、発展課題実習Ⅰの開始前から発展課題実習Ⅱの終了時までの期間を4分割し、「とてもあてはまる」～「全くあてはまらない」の4段階で評価してもらった。アンケート結果をカイ二乗検定にかけ分析したところ、有意差は認められなかった。しかし、協働学習に対する感想を記述式で調査をしたところ、初期のアンケートでは、協働学習に対し「眠たくないからあったほうがいい」という意見が多かったのだが、最終的には「意見交流をすることにより内容理解が深まった」や、「前よりも自分の意見を発言出来るようになったと思う」などの意見が増加した。このことから、継続的に協働学習を行うことで、対話活動の重要性を実感でき、生徒の発言のしやすさに効果があることが分かった。

3.2 振り返りシートによる効果

発展課題実習Ⅱの終了時に、振り返りシートについての感想を記述式で調査した。生徒の声として「振り返りシートで先生とのコミュニケーションが増えたのでよかった。」など、教員との信頼関係の構築に役立っていることが分かった。この要因として、振り返りシートに毎回コメントを返す際に、生徒の立場に立ちフランクな口調で返すことでより効果が出たのではないかと考えられる。

4. まとめ

本研究の結果より、授業実践後のアンケート調査では、結果に有意差は認められなかった。しかし、対話活動により「学びが深まった」などの意見が増加し、授業のかたちの1つとして協働学習の意義を明らかにし、生徒にも感じさせることができた。